

児童心理 1月号 No.961「やる気をひき出す」を読んで

1. はじめに

今回は、児童心理 1月号 No.961「やる気をひき出す」を読んで私が学んだことを以下に述べる。

2. 私が学んだ大切な言葉

(1)「子どものやる気をどうみるか」中央大学教授 速水敏彦先生

「勉強は子どもにとって楽しいはずだ」という前提でこども教育がなされることが多い。人間は「怠け者ではない」と言い切る人は特別優秀か無理をしている人ではないか。勉強とは勉めであり、強いる面が多い。「勉強は楽しい」ではなく「勉強は大変だ」という考えに立つとこどもの動機付けのあり方は異なる。学校で授業をしっかりと聞こうとするやる気や家庭で学習をしようとするやる気は、いわば日常的に習慣化したものである。それは自動的に自然に生じてくるものであろう。どのような経験をすれば内面化が進むのか。それはおそらく勉強の価値を伝える人との人間関係によるところが大きい。親しい信頼できる先生や親に勉強の大切さを伝えられれば、子どもはそれを受容できる。だが一方では習慣化するためにはそれなりの外からの規制も必要で一定の厳しさも必要だろう。こどもの言うことを何でも認めるようなやり方では「大変な勉強」の習慣がつくはずがない。権威的ではあるが、親密でやさしい大人からの働きかけこそが必要である。子どもが大人に従って勉強に前向きになった時こそ励まし続けてやることが肝要である。心が乱れているときは勉強のことは二の次で、安全や安心の欲求が満たされない状態である。したがって、勉強に向き合うには、勉強以外のことで心配事がないことが前提である。学校や家庭に心理的に安定した「快」を感じる背景要因があることが最も大切である。「大変な勉強」を遂行するには「授業外の楽しさ」を十分に味わっていることが必要。

(2)「こどものやる気はどうすれば育つ」目白大学教授 小野寺敦子先生

やる気とは「進んで何かをしようと思うこと・またその心の動き」である。やる気のある人とは、自分が将来やりたい目標をしっかりと立てており、その目標に向かって前向きに取り組み、自分らしさをもっている人。やる気のある意欲にあふれる子どもに育つには、幼児期に自律性をしっかりと確率させることが重要である。親を否定的にみる子どものほうが、そうでない子どもより自律性が高いという結果が報告されている。親を批判できる子どもは、批判するための語彙力と話術をもっており、将来、精神的にたくましい大人に成長し、意欲あふれる仕事をする可能性が高い。むしろ心配になるのは、親の言いなりになっている素直すぎる「よい子」たちである。

「よい子」は小さい頃より親の言うことを素直に聞き入れ、親や大人を困らせるようなことはしない。自分の感情を抑えてじっと我慢をして親の期待に添うように育ってきた「よい子」の自律性は低く、アイデンティティも定まっていないうだ。親がグッと我慢して子どもがやりたいと言ってきたことを自由に思いっきりさせてみるのが大切である。子どもにパーフェクトを期待するのではなく、一人で試してやろうとする行動に期待することである。たとえそれが失敗に終わっても「自分でやろうとしてえらかったね」と一人でやろうとした行動を褒めてあげることが重要である。

(3)「やる気がある子とない子の違いを生むもの」千葉大学准教授 大芦治先生

愛着に関係した動物実験がある。子ザルに「鉄で作った親ざるのぬいぐるみ」と「布でできた

親ざるのぬいぐるみ」を与えた。鉄のぬいぐるみにはミルクを飲む装置がついている。実験の結果、鉄のぬいぐるみに接するのはおなかがすいた時だけで、それ以外の時間は布のぬいぐるみに抱きついたり、近くで過ごすことが多かった。また別の実験では、布のぬいぐるみなしで育てられた子ザルは後に不適応的な行動が増えた。これは適切な愛着が形成されなかったことによる影響と考えられる。すなわち、子ザルは生存に必要な栄養を補給してもらうという動機以外に親のような個体と関係を持ちたいという動機が生まれつき備わっていることがわかる。アメリカの心理学者セリグマンは動物実験により「学習性無力感」を提唱した。その実験は次のようなものである。一つのグループは自分でボタンを押すと電気ショックを止めることができる。他方のグループはボタンを押しても電気ショックを止めることができない。この状態をしばらく維持した後、別の課題をやらせてみると、一つ目のグループは一生懸命に課題をやらせようとするが、他方のグループはやる気をなくし最初からやらせようとしなない。これは電気ショックのような外傷的な経験をし、それを自分の力ではどうにもならいと学習してしまった結果、無気力になってしまったからである。学習性無力感は単にその時限りのものではなく、一度学習性無気力感になってしまうと、なかなか回復せず無気力な状態が続くばかりか、発育不良やさまざまな病気を招き、中には実験の後死んでしまった動物もいた。

(4)「先生が嫌いだから勉強したくない」名古屋大学准教授 中谷素之先生

子どもが興味を持つ授業をすることが、子どもの学習意欲をひき出す一番の方法だと考えられているが、しかし、どのように教えるかという点だけが、子どもの意欲にかかわっているわけではない。教師と子どもの人間関係は、子どもの学習意欲を支え、ひき出す基盤となる。教師のお気に入りともいべき「教師のペット」のような児童・生徒がいるクラスでは、当人以外のクラスメイトは教師やクラスに対して否定的な感情を抱き、やる気も低い。教室の社会的環境が、子どもの学習や意欲にどのような影響を与えているか、教師のサポート要因として「先生は私の気持ちをよく理解しようとしてくれる」などの教師の情緒的サポート、「先生は私がどのくらい学んだのかに気をつけてくれる」などの教師の学業的サポートの二つが大切。教師の情緒的サポートは、学業到達目標と、学業自己効力感の両方に影響している。そして教師の学習指導では、相互作用の促進が、同様に学業到達目標と学業自己効力感の両方に影響している。情緒的サポートとは「子どもの気持ちを理解」することであり、相互作用の促進とは「お互いの考えを共有すること」である。教師が個々の子どもの気持ちや考えに配慮するサポートを行うこと、その上で具体的な学習指導において、子どもどうしが一定のルールのもとに積極的にかかわる機会をつくり、相互の考えや立場を相互に尊重させるようにすることが重要である。「先生が好きだから、勉強を頑張りたい」、教師が、まず子どもや教育に対して前向きで積極的な態度になり、それによって子どものやる気をひき出す、いわば「やる気の伝達」である。

(5)「やる気理解とひき出し方 失敗はしたくない」岐阜聖徳学園准教授 安藤史高先生

失敗を過度に恐れるあまり、意欲をなくし消極的になってしまう子どもたちがいる。ある課題や目標を成し遂げることを心理学では「達成」と呼び、達成を求める動機を「達成動機」と呼ぶ。代表的な「達成動機理論」としてアトキンソンによるものがあるが、それによると達成動機は、成功を求める動機と失敗を避ける傾向のどちらが強いかによって決まる。では失敗を回避する傾向とは何によって強まるのであろうか。アトキンソンの理論では、期待と価値という二つの要因が考えられている。ここで期待とは失敗の確率で、価値とは失敗した時に感じる恥ずかしさであ

る。失敗を避けたい理由は様々で、例えば、失敗したときに他者にどう思われるか、失敗したことで将来がどのように変わるかなどがある。失敗する確率が高いと思うほど、失敗した時のデメリットが多きほど、失敗を回避する傾向が強くなり、課題に挑戦する意欲が低下する。失敗の原因がなかなか取り除けないもの、変えられないものであれば「どうせやっても失敗するから、やらない」と考えてしまう。「頭が悪いから、どうせできない」という子どもは、それまでの自分の結果を能力に帰属し、これからも同じような結果になると予測するために、意欲を低下させている。

(6)「やる気の理解とひき出し方 どうせ無理」大阪産業大学准教授 西口利文先生

子どもたちは、生まれてから心身の成長発達に伴い、日常生活の中で、それまでできなかったことができるようになるという数々の経験をしていく。こうした経験を重ねることを通じて「自分は目の前の課題をうまくこなすことができる」という感覚、すなわち「有能感」を獲得していく。「自分の努力は、成功することに結びついている」という信念は、努力と成果に関する随伴性認知と呼ばれる。自らの努力が成功に結び付かないという経験をすと、この随伴性認知をしないで失い、自分は何をやってもうまくできないという無力さを学んでしまう。こうして形成された無力感は「学習性無力感」と呼ばれる。「学習性無力感」は「一般的無力感」と「個人的無力感」に大別される。「一般的無力感」は「目の前の課題がものすごく困難なものであり、誰であっても解決することは無理」という考えを伴う。これに対して「個人的無力感」は「目の前の課題は、他の人はできるようだが、私にはどうも無理」といった考えを伴う。こどもの内面が個人的無力感に圧倒されてしまうと、自尊心の低下をはじめ、感情、認知、動機づけなどのさまざまな面への不適応的な影響を受けることになる。個人的無力感に陥ったこどもに対しては、いかにその状態から抜け出させ、適切な有能感身に着けさせていくかということが、周囲の大人において対応すべき課題となる。直面する課題に対して再び前向きに取り組ませるには、まず本人のこれまでの努力が、実際には何らかの成果となっている事実があることを、はっきりと認識させることである。過去の経験の中から、うまくいっている状況について気付かせることである。

3. おわりに

こどもたちのやる気をどのように引き出すか、これらの論文を参考にしながら保育実践していきたいと考えている。

KM テクノソリューションズ代表 南側晃一